

24の講義内容 句読点「、」「。」はどう用いてきたか

符号と句読点の用法

萩原 義雄

↑符号を書き入れる

句点「。」 読点「、」

カギ括弧「」、二重カギ『』

丸括弧○、亀甲括弧□、

山型括弧^∨ 文字やことばを包む

疑問符「?」、感嘆符「!」

ハイフン「—」、ダッシュ「――」

リーダー「……」

↑句読点の用法

〔例文1〕

おじいさんが かぶの たねを まきました。

おじいさんが、かぶのたねをまきました。

『新版文章表現辞典』東京堂出版より』

1 私の家は、駅から遠い町外れにある。

2 花は咲き、鳥は歌う。

3 父も喜んだ、母も喜んだ。

4 社会的、歴史的観察。

5 鳥が二、三羽飛んでいく。

6 静かな、明るい朝でした。

7 風が強いので、ぼくは窓を閉めた。

8 先生、この、芋に似た虫は何と言いますか。

9 大きな、めがねをかけた男

10 広島の、おじさん・おばさん・花子さんによろしく。

11 もしも、天気がよかつたら……

12 しかし、私は反対だ。

13 おお、寒い。

14 なんだ、このさまは。

15 「野球をしよう。」と、兄は言った。

16 よく晴れた夜、空を仰ぐと、……

17 ここで、はきものをぬいでください。

18 カン、カン、カント、鐘が鳴った。

19 かつお、まぐろ、かじき、または、さめを……

20 府県知事は、市町村長から人口動態統計月報の送付を受けたときは、これを検査して記入漏れ、計算誤り等あればこれを当該市町村長に尋ねて訂正した上、……

「問題」ア読点がないとまずい文、イどちらかといえればあった方が善い文、ウ場合によりけりな文、エ別になくても困らない文、オ読点以外の記号を用いた方がよい文。それぞれの文章について確認してみよう。

《解題》

※1 「主題提示の「は」の後の「、」

※2・3 並列する表現には「、」が必要不可欠。

※4 中点「・」の方がよい並列性ことば。

※5 打つべき。

※6 いらぬ。ただし、修飾語が長くなるときは必要である。

※7 別になくてもいい。ただし、下記表現のときは必要。《例文》普通の子より足が少し短いのですごく気にしていた。(『朝日新聞』一九八八年七月二十八日夕刊)

※8 第一の点は「呼びかけのテン」(話しことばにおけるポーズを書き言葉で表現したもの)。第二のテンはことばのかかり受けを明確にするテン。

※9 意味を伝達する意味で、必要不可欠なテン。

※10 「広島の」が三つの文にかかることを明確にするテン。

※11・12・13 はあってもなくてもよいテン。

※14 必要なテン。倒置表現

※15 無くてもよいテン。

※16 「よぞら」と誤読されなかったためのテン。

※17 テンの有無で意味合いが変貌する。

※18 場合によりけり。

※19 打つべきテン。文字の読みやすさ

※20 文が長ければ長いほど、必要。三つ目の点は中点がい

《まとめ》

「読点の機能」は、文を分かつことにある。

ここで、森鷗外の作品『高瀬舟』を用いて、その句読表現を分析してみよう。この小説の書き出しは「高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。」とし、国語辞書の意味説明の模範式定義文にて叙述する。このため、読点はいない。これに対し、末尾は「次第に更けて行く臙夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。」という具合に、一文中に読点が二度用いている。実は、書き出しの二文末もこの一文読点二箇所である。次にこれらの用例を示す。

一文読点○箇所の文章表現

○いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。

一文読点一箇所の文章表現

○それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。

○此舟の中で、罪人と其親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。

一文読点二箇所文章表現

○徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をするを許された。

◎これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた、黙許であつた。

※下から上へ読み上げるとことばの意味説明文であることが分かる。

○高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。

○護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。

○そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間、不快な職務として嫌はれてゐた。

一文読点三箇所文章表現

○それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。

○有り觸れた例を擧げて見れば、當時相對死と云つた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男と云ふやうな類である。

○所詮町奉行所の白洲、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出来ぬ境遇である。

○場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人と其親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が辛領して行くことになる、其同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

一文読点四箇所文章表現

○當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し火を放つたと云ふやうな、**癡惡**な人物が多数を占めてゐたわけではない。

○さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つつ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。

一文読点五箇所以上文章表現

○同心を勤める人にも、種々の性質があるから、此時只うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄ゆる氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。

○さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この瘦肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。○其日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて來る夏の温さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。

このように、一章分のところを分類してみただけでも多様な長さで記述していることが見て取れる。ここでは紙数の関係でこの程度に留めておきたい。ただ、気づいたことをここに覚書きにしておく、1『高瀬舟』では、接続詞「さて」「そこで」「そして」「しかし」「かうして」「すると」などの後に読点を原則として用いていない。

2「兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立ち昇る」と並列表現「からも」の後には読点をそれぞれ用いる。

○それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

この反対に「光の増したり減じたりする月を仰いで」「や」「どれもこれも島へ往くのを悲しがって」といった畳語表現には読点を用いない。

3 短い一文としては「いやいや。」や会話問いかけの「喜助。」應對の「いや。」「濟まない。」のような表現に見えている。

4 一文の句点は「喜助の話は好く條理が立つてゐる。」と云う具合に、書き手鷗外の場面情況の判断文を構成している。